

へ川府根

三敬本岡



筑

岡

根

摩

本

府

書

敬

川

房

三

へ

根府川へ

二〇〇三年十月十日 初版第一刷発行

著者

岡本敬三

発行者

菊池明郎

発行所

筑摩書房

印刷

株式会社精興社

製本

牧製本印刷株式会社

岡本敬三（おかもと・けいぞう）
一九五〇年、東京都生まれ。アジ
ア・アフリカ語学院ヒンディー語
科卒業。こぐま社、東急ハンズ、
西武百貨店池袋コミュニティ・カ
レッジなどに勤務。その間、折
久美子氏に製本工芸（ルリユー
ル）を学ぶ。「日々の余白」が二
〇〇一年度新潮新人賞最終候補作
に、「根府川へ」が二〇〇二年度
太宰治賞最終候補作に、「無言歌」
が二〇〇三年度太宰治賞最終候補
作に選ばれる。

ISBN4-480-80372-6 C0093 Printed in Japan
© OKAMOTO KEIZO

乱丁・落丁本の場合は、左記宛に御送付下さい。

送料小社負担でお取り替えいたします。

ご注文・お問い合わせも左記へお願いします。

〒三三二-一八五〇七 さいたま市北区櫛引町二-六〇四
筑摩書房サービスセンター

電話〇四八-六五一-〇〇五三

目次

日々の余白	5
根府川へ	73
無言歌	117
「ふんふんなんだかいにおい」(加藤典洋)	175
あとがき	185

根府川へ

装幀・望月通陽

日々の余白

八木さんが目を開けると、隣りの布団はたたまれ、しまわれていた。こもった空気を入れかえるためか、窓は小さく切られている。かすかに風は流れていて、誰かがどこかでピアノを弾いたり、くしゃみをする音がする。

耳を澄ませば、階下で水を流したり、ドアを閉じたり、上のうちのひとがなにかをしている——たぶん畳をふいているそんな気配もきこえてくるはずだ。

八木さんは枕元にある本の上をさぐった。

夢から覚めるところから一日をはじめるときも、酒を飲むところから一日をはじめるときも、ものもいるが、眼鏡をかけるところから八木さんの一日ははじまる。近眼で十センチも離すと自分の指が何本だったかもわからなくなるし、それから先の世界となるとなんにも様子がつかめないのだ。

本の上に眼鏡はない。八木さんはそれでも寝たまま手をのばし指先に眼鏡のつるがひっかかるのを待ったが、いつこうに期待どおりにはならない。

きつとこんなときは頭にのっかっていたりして。そうおもったのか、髪の毛の薄くなった額の上部に指をはわせている。

あるはずのものをさがす時間が近ごろふえているのはたしかで、年のせいなのかもしれない。八木さんは体を起こすとお尻を天井につきあげて、枕の下はもちろん、ふとんの下もめくつてさがしはじめた。

枕元に積み上げてある本の山の谷間を広げ、さらに崩すのだが、眼鏡は見つからない。ぐちゃぐちゃになった本をふたたび積み上げたが、山のでっぺんに置かれる本はここ半年あまり同じだ。八木さんが寝しなにとるのは小説で、単身で留学している日本人が妻子と暮らせる住まいをさがして、ベルリンの街をただ彷徨して歩く話だ。

ストーリーはこみいつていないから、どこから読んでもどこでやめても、それほど八木さんは困らない。犯人を考える必要もないし、登場人物たちの関係をそれほど追わなくてもすむ。

だから、奥さんのおせんさんとした夜（一年に三回ちゃんと抱いたり、抱かれたりして、年に四回は相手の気持ちをしる程度だ）に、あるいは会社で起きたことを心の内に登場させまいとして（これはけっこうある）おせんさんの前で寡黙と饒舌をくりかえしたあとも、この本を読む、というか、ながめている。

物語の主人公は解決しなければならぬ現実があるのに、現実の出来事をひたすら語りつづけていて、タイムリミットだけが迫るといったぐあいだから、八木さんは歯がゆい気持ちにもなる。歯がゆいからなんとなく口蓋をぐずぐずと舌でかいたりしているうち、いつの間にか眠ってしまうことになる。

来る日も来る日も、本のなかの「私」は下宿斡旋所に顔を出す。新着の貸室リストをめくり、

これはとおもう部屋をたずねて、部屋の様子や貸し主の性格を観察しながら、条件をきいてみる。「私」の理想とする部屋は快適な居住空間、人柄のいい家主、安い家賃、それに隣近所の環境の良さだから、そんなところはどこにもない。ないことはわかってくるから、気に入ってというより、無理にそうおもいこもうとして、「私」は理想を下げつづける。これぐらいなら、いくらか理想に近い。そんなつぶやきが読みとれて、八木さんはわらう。部屋数だって少ないことは少ないが陽あたりはいいとか、家賃だってあれこれ支出を削れば……、甘い計算をしきりにしたりする。家賃の予算をだんだん上積みしていくあたりで八木さんがうなずいていると、たいがいは「私」に一歳の子どもがいるという理由で、ことわられてしまう。子どもはそこいらじゅうを汚す。生きているだけで部屋が痛むからとか、そんなやりとりがあつて、それでも家族持ちでもかまわないという貸し主があらわれる。するとこんどは、その家の「黒い穴がぼっかり一つ空いている」だけのトイレが気にかかり、断念する。

くたびれはてた「私」は、間借りしている下宿の大家——未亡人へ憎悪をつのらせてゆく。彼女は病的にきれいすぎで、共同で使う台所の汚れや煮炊きのおいにも口やかましい。米を炊く。吹きこぼれる。粘ついた精液のような白い液と蒸気。「私」のあたたかいご飯と「彼女」の冷たい料理をあいだにはさんで彼らはいさかう。やがて憎悪が部屋さがしの困難さというか、日常の不条理さと重なるのだけれど、八木さんには、未亡人も主人公も、おんなじ感覚の持ち主に読めてきってしまう。

こいつは、ふたりとも人間ぎらいだ。そばで年じゅう息をしている人間にがまんできないとい

うことだぞ。

なぜそういう感情になつてしまうのか、書いているほうも理由をきちんと説明できないらしい、と八木さんは寝かかるまえのぼんやりとした頭のすみっこで感じてしまい、主人公と小説の先行きが、なんだか不安になつてくる。主人公の目的が部屋を見つけることなのか、それとも、見つからないことを楽しみながらベルリンの町を歩きまわることなのか、そうしながら未亡人を憎悪する自分について語ることなのか、ずっとわからないままになっている。

八木さんがその本を買つてから二十五年はたつ。そのころはおせんさんと結婚もしていなかったし、ハゲがかつてもいなかった。いまのように髪をとかすたびにあらうごとに、毛がかたまりになつて抜けてしまうなんて想像もしていなかった。ハゲになりかけているのもおれのせいじゃないやと、およそ特徴のない顔——おせんさんにいわせると、ゆで卵にへのへのもへじを、描く気のない子どもがしかたがなく描いた目鼻立ちで、眼鏡を十五分ほどあちこちさがしていたが、腹が減つてゐるのに食うのがめんどくさい、でもなにか食わなければ体がもたない、そんな状態におちいつてしまつたのか、ふとんにへたりこんでいた。

八木さんは記憶をたぐりはじめた。

昼間はパンフレットの表紙につかう写真やイラストを、眼鏡をはずしたりかけたりしながらながめていた。それを見て、老眼じゃない？　なんて、編集プロダクションの担当者がいつて、キヨスクで買った老眼鏡を、ラクですよ、とよこした。試してみても、見えているのだから見えていないのだから、はつきりしない。

カメラは機械だから広角、望遠、標準レンズとちやかちやか交換されてもへいちゃらだらうけれど、目には気持ちいいものがある、そんなことをぶつぶついながら、自分の眼鏡と換えたことを覚えている。

居酒屋ねえ。あそこではひとりだったか。自分よりひとまわりほど年上の平らかな顔をした呑屋の主を、八木さんは頭に浮かべた。いつも糊のびしやりときいた真つ白い割烹着を着ているそのひとは、まるで子どものころ近所にたくさんいたおばさんだ。ゆうべもそんなことを感じながら、彼女に、「同僚の石野くん」と紹介したから、ひとりじゃなかったんだろう。

たしかに八木さんは石野くんとカウンターの席に腰をすえ、十月からの講座の計画をあれこれ話していた。そのうち、飲んだくれて、親会社のデパート——石野くんは百貨店とただしく呼称したけれど、八木さんは成金デパートだ、あんなモンとほざいた——の経営者が東欧から大量に仕入れて売れ残った羽毛ぶとんに話は移った。

寒いときだってそれほど売れないシロモノが、どうしてムシムシしている六月に売れるのよ。なに考えて買い付けたんだあのアホ。親戚がいたつてもう頼みこめないぜ、と八木さんがアホの実名をあげてののしると、石野くんが、はたして彼がアホなのか、ほかにアホがいるかもしれない、だつておとしは宝石とスーツで、去年は電化製品を、決まってポリーナス時期に押しつけられたじゃないですか。いくらなんでも三年もつづけて、ひとりのアホがアホなことをくりかえすわけがないといつて、そのあと、アホの所在がわからなくなるのが会社っていうものだということで、意見が一致した。

そんなろくでもないグチをこぼしているさいちゆうに、眼鏡をはずしたりかけたりはしたけれど、勘定書の字は読めたのだから、置き忘れたというわけはない。

それとも酔ってしまつて、見えないものも見えていたような錯覚に落ちいつていたのか。それなら、それから先も、八木さんが見たものはぜんぶ錯覚になつてしまうだろう。

阿佐ヶ谷に帰る石野くんと別れ、八木さんは電車の切符を買つた。石神井公園まで片道二百円。定期券を買わないわけを、おれは定期を買うほどおちぶれていないと八木さんはおせんさんにいうが、それ以上の理由は説明できない。

そのわけのわかりにくい気持ちには、おせんさんにはなんとなくわかるのか、買ったつてどうせすぐなくすからでしょうか、安いからねえとか、定期代つかいこんだんでしょうかいってことはない。

八木さんの定期を買わないでいる気持ちには、いろんなことが混みいつているようで、解きほぐしていけばなにかが残るだろうが、その残つたなにかがほんとの気持ちかどうかはわからない。そういう気分はおせんさんにもあつて、中学生のころにあつた父親の葬式の様子を八木さんに話したことがある。

行き来のない親戚の男がやたらに写真を撮つていたのね。葬儀社のひとかなとおもうぐらい、事務的な感じで。事務的つて？ と八木さんが口をはさむと、感情が表にけつして出ないことだと、おせんさんは説明した。彼は祭壇や供物、とうさんの遺影、焼香をするひと、泣くひと、ああいふ場面で談笑してしまうこともあるけどわらつているとうさんの知り合いの人たちの表情も、

棺に釘を打つ瞬間や、骨を拾う箸と母の手元と顔も、そんなところまでひっきりなしにワンカットワンカット、アングルに凝って、モータードライブのついたカメラでカシヤカシヤ撮りつづけていたんだ……。

そりゃあ、プロのカメラマンだろうと八木さんがきくと、そんな親戚はいないとおせんさんはこたえた。

別れぎわにフィルムをそのまま母親に手渡していったの。いやな瞬間だったよ。手渡すほうにも、手渡されるほうにもなんのわだかまりもなく、もしかしたら、母親が撮影を頼んだのかも知れないけれど、いやあな感じだったな、ムキダシのフィルムなんて。

別に責めるようなおこないでもないのだが、八木さんもみような気持ちになった。ひとにも自分にも説明できない、こういうばくぜんとした感覚、無理に解きほぐさなくても、束だからこそなんとなくわかってしまう気分はどこからわいて出てくるのか、八木さんはわからないままに、けれどもうまくいえないけど、それはヘンな光景だぞ。写真というのはさ、プリントして、そのなかから選んで、ひとにわたすもんだぜ、とおせんさんにいった。

八木さんは布団から立ち上がった。

おせんなら、たぶん眼鏡の行方を知っているだろう。

台所をのぞくが、ひとの姿は見あたらない。大型の冷蔵庫と丸い木のテーブル。椅子がふたつ、それだけで空間はいっぱいになっている。蛇口から水の落ちる音がときおりする。八木さんは椅子を引き出し、下腹を引っこめながら腰を下ろして、煙草に火をつけた。

台所そのものは三畳ぐらいいで、ここを仲介した不動産屋は、築三十年でもグレードの高いマンションの部類だといい、なるほど図面にはダイニングキッチンとなっているが、ふたり並んで料理もできなくて、「なアにがダイニングキッチンでしょう、ダイドコでたくさんだ」とおせんさんは憎まれ口をたたいた。

けれども、八木さんは、四ついつぺんに煮炊きができるガスコンロ——いつぺんに使うことは年に二、三度だけだが、それにひかれ、おせんさんもベランダにガラス戸をむりやりはめこんだような、大きさをいえば畳を縦に二枚ずつ細長く並べた木の床のサンルームが気に入った。

ふたりとも更新の二年ごとに引越すことに、楽しさよりもおつくうさを感じはじめていたし、動くよりも、動きたくない、そんな気持ちになっていたこともあって「たがいに四十歳だからそろそろついすみかをもつか」という弱い動機のまま、研究もせず、ちよこちよこと一日見て歩いただけで（このへんがベルリンの町を歩きまわる男とまったくちがう）三十五年のローンを組んだ。

しずかなので八木さんは咳払いを試みた。

「起きているの？」

トイレのなかからおせんさんがこたえた。

「きのう酔って帰るなり、羽毛ぶとん、オンナノコ、羽毛ぶとん、オンナノコって、百万回もヘラヘラくりかえして、いくらききかえしても、それしかききとれなかったよ」

八木さんが口ごもっているうち、トイレから出てきたおせんさんは、コーヒーをいれようかと

いい、ガス台にポットをのせてから、八木さんの隣りに腰を下ろした。

「それがどうしたの？　ときかえしても、オンナノコ、羽毛ぶとん、それだけ。しばらく黙ったとおもったら、トイレにふらふらいつて、それからシャワーでも浴びるつもりだったのかなあ、やぎくん、浴室にはいりかけたのに、すぐ出てきて、電車のなかで出会った男と彼をたすけた女のひとの話をしだしたんだよ」

八木さんのまえに立っていた男は電車の揺れのためか、人いきれのせいか、たぶん飲みすぎたのだろう、アルコールが体の深い芯に入ってしまった様子で、見ていたら、いきなり吊り革から手を離し、折れ曲がった膝に両手をついて、そのまんま一駅のあいだ揺れていた。

うん、男のねえ、両方の頬がまるで風船がついにふくらみかけた状態になって——こんなにふくらんだと八木さんはもとふくらんでいる自分の頬をさらにふくらませてみせた。

八木さんにも、胃から食道へと食べ物 がせりあがってきて、もう出す以外に行先のなくなったものを出すことも飲みこむこともできずに、頬袋にいれた経験はあるから、ヤバイと感じた。あれは苦しいもんだ、知っている？　ときいたが、おせんさんはそういう自分を想像しただけで気持ちが悪くなったのか、返事はなかった。

で、頬袋のとなりに立っていた十九だか、三十だかの女が、最初は迷惑そうな顔をしてたのに、肩に下げたバッグから袋を取りだしたんだよ。きっちりたたまれたコンビニカスパーの白いポリエチレンの袋をひろげて男の口もとなあ。やつはさ、顔をやつとこ上げて、そいつに吐くと、オンナノコは、ガーゼのハンカチで、男の額の汗をぬぐってやった……